

日本文化探究をととした生徒の向上

流山市立南部中学校 教諭 村山義則

はじめに

テーマ設定について

- ・ テーマ
- ・ 仮説
- ・ 仮説により表れると考えられる具体的な生徒の姿
- ・ 仮説へのアプローチの方法

実践

日本文化探究の3年間の取り組み
修学旅行における体験を通じた日本文化探究
決意の場として捉えた修学旅行の取り組み

成果と課題

- ・ 学校のアンケートから
- ・ 修学旅行後の生徒へのアンケートから
- ・ 今後の課題

補足 資料1 誓いのシナリオ
資料2 生徒の個人新聞より

．はじめに

本校は、千葉県北西部に位置する流山市にある。流山市は江戸川の水運を用いて発展した地域であり、小林一茶の逗留や新撰組近藤勇と土方歳三の別れの地などとして歴史の上で顔を出している。秋葉原と筑波を結ぶ「つくばエクスプレス」が昨年8月に開通し、本市でも3つの駅が開設され急速な開発が行われている。本校から約1km離れた所にも流山セントラルパーク駅が置かれ、その周囲で宅地化がすすみ、今後更に生徒数の増加や環境の変化が予想される。

市内には8つの中学校があり、その中で本校は最も古い学校である。生徒は流山小学校と流山北小学校の2校より大半が入学してくる。現在の生徒数は694名、19学級（うちわかかさ学級1を含む）で近隣では規模の大きい学校に属する。

本校では体育館背面に貼られた「伝統の上に新たな伝統を作ろう」というスローガンの元、3年生が中心となり色々な活動を行っている。在校生による新入学の迎え入れ準備、入学後の新入生指導と工夫を凝らした発表を行う新入生歓迎会、学級ナンバーの6色対抗で行われる体育祭、美しい声が響きわたる合唱祭などさまざまな行事がある。また、ベランダでの朝顔の栽培やジャガイモの植え付け、七夕や豆まき、学級の時間を使ったシスターレクなど生徒にとって四季や仲間と触れ合うことができる場所である。



現在、本校で積極的に行っている活動は「地域との連携」と「ボランティア活動」である。

「地域との連携」では、全ての活動の基本となる挨拶を核に、体育祭の敬老招待・卒業前の3年生の公共施設及び地域の清掃・各行事の積極的な公開などを行い、来校者や近隣の方から高い評価を受けている。そして、このような活動の延長として、小学校の運動会の後片づけを見学に来ていた本校生徒が協力したり、大雨で詰まった下水のゴミを取り除くといった姿が見られるようになっている。さらに、一昨年から小学校に行きミニ先生としての活動を行うことで、地域の一員としての自覚と貢献について学んでいる。この活動は小中の連携として小学校から喜ばれており、昨年は新聞にも紹介されている。

ボランティア活動では、収益金を社会に還元していこう毎週アルミ缶の回収を行っている。活動初期は、車いすを購入し、福祉協議会へ寄付を行っていたが、現在は継続的な支援という考えのもとフォスタープランへの参加という形に変えている。このような活動の結果、社会への貢献という考え方が生徒に浸透し、一昨年の中越地震及び昨年のパキスタン地震への対応という形で表れた。両地震では、いち早く校内の募金活動を行った後に、生徒の発案で駅前での街頭募金を行った。集められた募金は災害地に寄付して終わりということではなく、自分達が被災者だったらという生徒の考えで使われた。中越地震では寒冷地という状況を考え、被災地にフリースと簡易カイロを贈った他、被害の大きかった3つの小中学校の生徒の心が安まるよう多数の本を贈っている。この本は先方の学校の生徒に大変喜ばれ、南部中文庫として大切に扱われている。また、昨年のパキスタン地震では生徒自らがパキスタン大使館に行き、同じ年頃の子供が安心して学びを再開できるように使って欲しいと駐日大使に願いを伝え、手紙と共に募金を渡してきている。これらの活動は生徒会及び学級委員の集まりである学年委員会を中心に生徒達の手で行われており、南部中の新たな伝統として育ちつつある。



アルミ缶回収の行う生徒



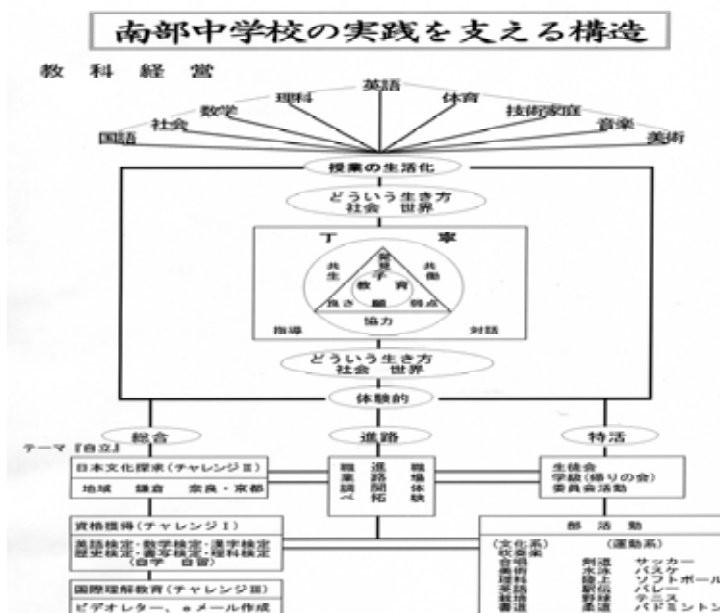
パキスタン大使に募金を渡す生徒会長と生徒会役員

・テーマ設定について

本発表のテーマは「日本文化探究をおとした生徒の向上」である。本校では「挑戦」という言葉をキーワードとして、右の構造図の考え方を教育の基盤とし、授業・特別活動等を行っている。

特に昨年度より、学びの構えという点を重視し、不学の友を許さない仲間関係、拳手・返事・起立・発表の姿勢を大切に授業のスタイルに全職員が取り組み、好循環を作りつつある。

総合的な学習については平成13年より「生き方学習」と位置づけ、チャレンジ、として次のような内容で取り組んでいる。



構造図

流山市立南部中学校の総合的な学習の時間の狙いと内容

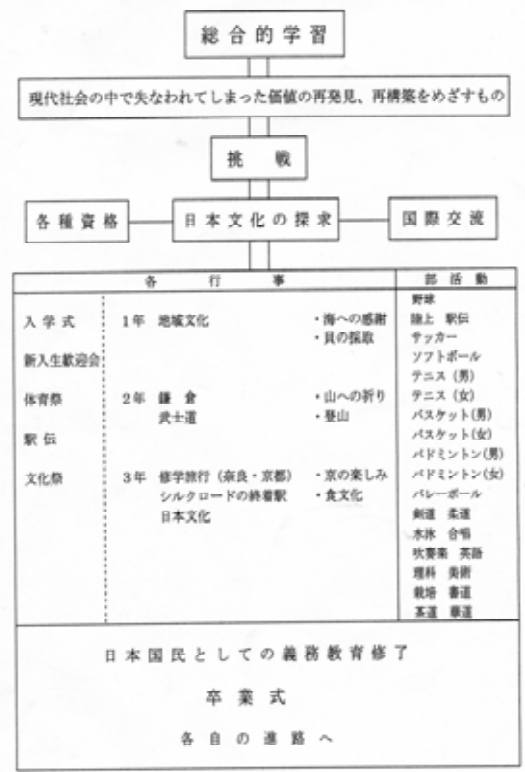
チャレンジ	学習の仕方の習得するとして検定の学習を行う 具体的には、週1回の総合的な時間及び朝自習の時間に設定した「みどりタイム」を活用し、資格取得の学習を行う。
チャレンジ	日本文化探究を通し、先人達の願いや英知に触れる 具体的には、3年間で1つの流れとして、1年生で自分たちの地域の日本文化探究から始まり、3年の奈良・京都と体験を中心とした江戸文化の探究まで総合の時間を用いて計画的に行う。
チャレンジ	国際理解を主に異文化の視点から見た日本について学ぶ 具体的には、文通や国際交流による異文化体験を行う。

チャレンジ は資格取得の学習を通じた学習の仕方、チャレンジ は3年間の日本文化探究の学習を通じた日本人としての生き方学習、チャレンジ は国際理解の学習としている。

チャレンジ の取り組みの成果として、毎年、英語検定・漢字検定・数学検定の受検者ののべ人数が全校生徒数を上回り、多くの生徒が資格を取得した後に本校を卒業していくことがあげられる。資格の内容についても、各検定の準2級の資格取得者の合計が2桁の人数を越えていることや現3年生の中で数学検定成績優秀者となり、現在数学検定準1級にチャレンジしている生徒が出ていることから考えてかなり充実した状態になっていると言える。特に、今回数学検定準1級にチャレンジしている生徒は、本校のチャレンジの時間を活用し、中学1年の3月の4級取得をスタートに現在に至っている。このような生徒を更に増やせるようさらに頑張りたいと考えている。

本発表の中心である修学旅行は、チャレンジの日本文化探究の総まとめ及び特別活動に位置している。このチャレンジは、3年間を1つの流れとしてとらえ、右の構造図2の考え方の元、各学年で次のように行っている。

- 中学1年 地域（流山市及びその近隣）を中心に博物館・神社仏閣等を利用し、地域に現存する日本文化（主として江戸時代）に触れ、その活動を通して、テーマ設定の方法と調べ方を学ぶ。
- 中学2年 近隣から地域を広げると共にテーマに沿った見学場所の設定を学び、3年の修学旅行につなげる。平成10年から15年までは地域を都内に設定していたが、16年より鎌倉に変更した。
- 中学3年 日本文化探究の総まとめとして、京都・奈良を訪れる。また、修学旅行後に発展として体験活動を行う。



構造図

今回、修学旅行は日本文化探究のまとめとなるが、ここでいう「まとめ」とは、学習テーマを作り、自分で調べたことを適切に発表できるようになるというだけでなく、日本文化を学ぶことで自分たちの文化の良さを知り、そこに込められた願いや英知に触れることと学んだことを自分の今の生活に活かしていくことを、ねらいとしている。さらに、日本文化探究の学習を通じて仲間と共に歩んできた活動の中で感じた様々なことを今後につなげていくことと考えている。

そして、このようなまとめを行えば、生徒達に変容が生じ、生活が向上していくと考え、本テーマを設定し、次のような仮説及び仮説からの具体的生徒像及び仮説への具体的手法を考えた。

テーマ 「日本文化探究をとおした生徒の向上」

仮説 「日本文化を学ぶことで自分たちの文化の良さを知り、そこに込められた願いや英知に触れる。また、日本文化探究の学習を通じて仲間と共に活動したことを活かせば、生徒達の生活に変容が生じ、向上がみられるだろう」

仮説によって表れると考えられる具体的な生徒の姿

「日本文化を学ぶこと（まとめとして修学旅行）を通して、仲間との信頼関係を築くことができる」

「修学旅行での誓いを通して、集団に対する帰属意識が高まり、挨拶や校歌に対してより一層頑張るようになる」

仮説へのアプローチの方法

修学旅行を最終のまとめとして、3年間の流れを持って取り組むことで、修学旅行までに日本文化についての学習の意識を高めさせる。

修学旅行で、先人が残した素晴らしい文化に触れ（体験）させ、今の自分達を振り替えさせる。

修学旅行の中に、学年が一体感を持てる場を設定し、生徒達に主体的に取り組ませ、自分たちの誓いを立てさせる。

実践

日本文化探究の3年間の取り組み

本校では、平成13年より中学1年で地域の博物館・資料館を利用し、地域の日本文化について学ぶことを行ってきた。そして、この活動を通してテーマの設定と調べ学習の仕方について学習した。

この取り組みにより、テーマの設定と調べ学習の仕方についての力を生徒に付けることができたが、利用してきた施設が京都・奈良への探究につなげにくいという課題が明らかになり、次のような改善を行った。

日本文化に学ぶという観点を特に意識した全体の授業を入れる

博物館を中心に行われていた見学場所に、地域の文化遺産である神社仏閣等を加えていく

については「文化を知る」という時間を総合的な学習の時間に設定し、学年全員が神社のしめ縄の意味と学校近辺の神社の歴史について学んだ。これにより、日常の何気ない中に潜んでいる先人の知恵やねらいについて生徒が学ぶことができた。その結果、自分の身の回りの文化に目を向ける生徒が現れ、の改善も同時に行われ、利用施設についても次のような変化が表れた。

平成13年の利用施設

流山市	流山市立博物館
松戸市	松戸市立博物館 戸定歴史博物館
我孫子市	鳥の博物館 水の館
野田市	野田市興風博物館

平成16年の利用施設

流山市	流山市立博物館	一茶記念館
松戸市	松戸市立博物館	戸定歴史博物館 本土寺 新松戸郷土資料館
	松龍寺 - 西蓮寺 - 善照寺	野菊の墓 - 矢切の渡し
我孫子市	鳥の博物館	水の館 我孫子市役所 - 子の神大黒天
野田市	野田市興風博物館	もの知り醤油館 食文化センター

このような利用施設の変化は、テーマについても次のような違いを生んでいる。

平成13年の日本文化探究で生徒から出されたテーマ

- ・昔の人々と今の人々の日常生活の違い（松戸市立博物館を利用）
- ・手賀沼の水が生活用水にもたらしている影響（水の館を利用）
- ・手賀沼はなぜ汚いのか ・水質汚染について
- ・我孫子市近隣の昔と今の鳥の種類の違い（鳥の博物館を利用）
- ・徳川昭武の生活について（戸定歴史博物館を利用）
- ・流山、野田の土器について（野田市興風博物館を利用）

平成16年度に新たに生徒から出されたテーマ

- ・本土寺は誰がなんのために建てたのか。松戸の地を選んだ理由は何か
- ・松戸の街道沿いに並ぶ寺について共通点を探る
- ・坂川の歴史と他の川との関わり
- ・松戸を高城氏が治めていた頃、流山にどのような影響があったか
- ・流山の特産物と近隣の特産物の共通点
- ・流山にはない我孫子の珍しい名前（子の神）の神社がそこにある理由は何か

また、中学2年での日本文化探究に置いて、次のような課題が明らかになった。

都内での活動で2年で見学、3年で体験を中心という指導をしてきたが、テーマによっては3年の時の内容と重なることが出てきた。

都内の見学地（特に明治以後の文化）をもとにテーマ設定をする場合、奈良・京都の文化遺産を用いたテーマ設定の練習につながらないことがあった。

そこで、2年生の日本文化探究についても改善を行い、見学地を昨年度から鎌倉へ変更した。これにより2年で鎌倉、3年で体験を中心とした都内の日本文化と活動のねらいが明確化された。また、2年の日本文化探究のテーマでも下記に記載したように、京都・奈良に通じる形へと変化が表れた。現3年生による鎌倉の日本文化探究後に感想を取ったところ、古都に関する事、歴史や武士道に関する事、修学旅行につながる事が出ており、2年生の活動の地域を都内から鎌倉に移したことがプラスの方向に働いていると考えられた。

鎌倉変更後に2年生から出されたテーマ例

- ・円覚寺の国宝とその時代背景について調べよう(2組美化班)
- ・鎌倉の町並みに何か工夫がないかを調べよう(1組福祉班)
- ・鶴岡八幡宮の歴史的な事件の場所について調べよう(5組美化班・5組福祉班)
- ・切り通しに行き、実際に見て工夫があるか調べよう(6組美化班)
- ・昔から残っているものは何か、残っている理由と共通点について調べよう(6組歌声班)
- ・鎌倉の寺と流山の寺の違いを見つけよう(6組福祉班)
- ・鎌倉五山のお守りの違いを調べよう(4組歌声班)
- ・大仏を建てたことによる影響について調べよう(4組福祉班)
- ・江ノ島電鉄の特徴について調べよう(3組歌声班)

修学旅行における体験を通した日本文化探究

本校では、日本文化探究として修学旅行で次のような様々な活動(体験)をしてきた。

平成11年・雅楽体験(～平成13年)

全国で初めて中学生として奈良で雅楽体験を行った。これは当時の鈴木校長先生の元で行われ、奈良での体験活動の先駆けとして奈良テレビのニュースで紹介された。

平成14年・学級の見学テーマに沿った宿泊(～平成16年)

各学級で自分たちの見学したいもの、体験したいものの意識を明確に持つよう、学級ごとに鞍馬・高雄・大原・嵐山から宿泊地を選ぶ分宿を行った。当初は1見学地に2学級を宿泊させていたが、最終的には1宿泊地1学級とした。学級の仲間とどのようなテーマで何を見学するかを考えさせる上で非常に有効であったが、一定の目的を達したと考えたことと安全面から、平成17年から学年で宿泊する形に戻している。

平成15年・興福寺での誓い(～平成16年)

生徒の決意表明の場として文化遺産として名高い興福寺を使用した。特に、平成15年は薪能を演じる日と重なり、薪能を鑑賞することができた。

平成17年・朝の読経体験(～現在)

平成17年から2年生で鎌倉へ日本文化探究の校外学習を行っているが、生徒達の考え方の中に「日本文化＝過去の遺産」という考え方があることがアンケートから分かった。そこで「日本文化＝受け継がれる伝統＝現代の我々が日々の中で大切にし、成長させていくもの」と考えさせるために、過去から現在まで行われており、現在も文化として残っている読経に触れさせることにした。これにより、生徒の意識を変えていくことを試みた。昨年、今年と西本願寺の読経を体験させたが、来年は最も古い灯明を伝える比叡山延暦寺の朝の読経体験を計画している。

「本物に触れさせる」という方針のもといろいろな文化体験を南部中では行ってきた。特に、平成11年からの雅楽体験は全国に先駆けたものであり、修学旅行の前後の音楽の授業とクロスさせることで生徒の心に強く残る体験となった。

また、先に述べたように生徒は日本文化を過去のものと認識しがちである。そこで、日本文化を連続したものと捉えることをねらいとして、朝の読経体験を昨年度より行っている。

今年度の体験では次のような生徒の感想がでた。

- ・平安時代の人々も聞いていたことを今、自分が聞いているのはすごい不思議な気がした。
- ・昔から続いている所に、人々の願いの強さを感じた
- ・あの場でお経を唱えている人は1つになっている感じがして日本人は凄いと思った。古くからの良い文化の一つだと思う。
- ・正座でものすごく足がしびれて大変だったが、凄いと感じた。
- ・詞の意味は全く理解できなかったが、人々が真剣に唱えている姿に何かずっしりとのしかかれるものがあった。
- ・心から何かを信じられるとあそこまで真剣になれることを知った。

決意の場として捉えた修学旅行の取り組み

夜の活動として、清水焼絵付けなどの制作活動・座禅又は講話・白拍子・蛍鑑賞・桃山城からの夜景・新京極での買い物などが上げられが、本校では、修学旅行を3年間の活動の集大成とし、旅行の夜に「誓い」を行ってきた。林間学園の思い出としてキャンプファイヤーを上げる生徒が多いが、それは、誓いやレクを通して仲間と共に過ごしたことが実感できるからである。そこで、修学旅行に置いても仲間と過ごした時間を強く意識させることができるならば、それは生徒の最高の思い出として残り、旅行後の生活に良い影響を与えるであろうという考えで行ってきた。

今回も、この考えを踏襲し行うことにしたが、発達段階を考え、2年時林間学園での「レクを通して仲間と楽しく過ごした」という部分を3年では「自分達の今までを振り返り、これからの自分達の成長を仲間と誓う充実した一瞬を創り上げる楽しさ」に変えることに重点を置いた。

具体的には次のことを意識して行った。

- ア．誓いの流れの計画や事前の練習では、生徒を主体的に活動させる。練習時間の設定は教師側が行うが、練習内容や最終的な練習計画については生徒が行う。
- イ．誓いを考えるときに、3年間で自分達は創り上げてきたものを振りかえらせ、言葉遊びにならないようにした。
- ウ．学年の決意を込めるものとして、夜の唄という曲を利用した。この唄は2番までの曲だが、学年の生徒全員から3番の歌詞を募集し、自分たちの決意を込めた歌詞を作り歌った。

このような指導の結果、生徒達が何を行うかが明確にされ、やらされているのではなく自分達がやっているのだという意識を持つことができた。その結果、生徒達は自分達の誓いに涙を流し、本能寺からの帰りのバスでは誰一人としてしゃべらない状況になった。修学旅行終了後の生徒の感想と本能

寺の誓いに対するアンケートについては、成果と課題で述べるが、この取り組みはその後の生活の向上と仲間作りに大きく関わることができたといえる。

．成果と課題

本校では、毎学期、学校生活に対する生徒の意識調査をアンケート形式で行っており、次の表が今年度の1学期に行った結果である。このことから生徒達は非常に学校に対して前向きな気持ちで取り組み、授業や部活動について意欲的に参加していることが伺われる。これは2でも述べたように、本校では構造図1の考え方を基盤とし、様々な活動に取り組んできた結果であり、3年間かけて取り組んできた日本文化探究もその一端を担っていると考えている。

学校生活は楽しいですか

	とても楽しい	少し楽しい	あまり楽しくない	全く楽しくない
1年	51.7%	40.5%	7.4%	0.9%
2年	41.1%	39.6%	15.3%	4.0%
3年	42.2%	36.7%	16.0%	5.1%
全校	45.0%	18.9%	12.9%	3.3%

授業は充実していますか

	とても充実している	少し充実している	あまり充実していない	全く充実していない
1年	27.4%	61.4%	10.7%	0.5%
2年	27.4%	61.4%	10.7%	0.5%
3年	19.9%	55.7%	20.3%	4.2%
全校	24.9%	59.5%	14.0%	1.7%

部活動は充実していますか

	とても充実している	少し充実している	あまり充実していない	全く充実していない
1年	62.3%	29.3%	4.7%	3.7%
2年	55.0%	26.0%	12.0%	7.0%
3年	58.3%	20.9%	11.3%	9.6%
全校	58.5%	25.4%	9.3%	6.8%

学級は楽しいですか

	とても楽しい	少し楽しい	あまり楽しくない	全く楽しくない
1年	45.8%	40.7%	10.7%	2.8%
2年	40.4%	37.9%	14.3%	7.4%
3年	51.9%	28.7%	14.3%	5.1%
全校	46.0%	35.8%	13.1%	5.1%

3年生では、学校生活がとても楽しいと答えた生徒より学級が楽しいと答えた生徒の方が10%近く多い。この後の本能寺の誓いについてのアンケートを見てみると、本能寺の誓いが大きく影響していることは明らかである。

本能寺の誓いについて 5段階評価（調査数238名）

本能寺の誓いを体験してどのように感じたか

1. 本能寺の誓いで仲間と一緒にいることを素晴らしいと感じたか	平均 4.5
5 とても感じた(62%) 4 感じた(35%) 2 あまり感じなかった(3%) 1 感じなかった(0%)	
2. 誓いを体験して仲間と力を合わせて向上していけると感じたか	平均 4.4
5 とても感じた(54%) 4 感じた(42%) 2 あまり感じなかった(3%) 1 感じなかった(1%)	
3. 本能寺の誓いをやって良かったと思うか	平均 4.7
5 とても感じた(71%) 4 感じた(24%) 2 あまり感じなかった(4%) 1 感じなかった(0%)	

本能寺の誓いをもとに修学旅行後に諸活動に対して自分が学級にどのくらい頑張れると思うか

1. 体育祭や合唱祭などの行事	平均 4.5
5 とても頑張れる(61%) 4 頑張れる(35%) 2 厳しい(4%) 1 とても厳しい(0%)	
2. 受験でお互いを思いやること	平均 4.2
5 とても頑張れる(41%) 4 頑張れる(51%) 2 厳しい(6%) 1 とても厳しい(2%)	
3. 学年目標「日常の支え愛い」	平均 4.2
5 とても頑張れる(44%) 4 頑張れる(48%) 2 厳しい(8%) 1 とても厳しい(0%)	

修学旅行後に学年が日常生活で向上した点があると感じているか。感じているならどのような点が向上したと感じているか

向上した点があると感じた生徒 209人 / 238人 (87.8%)

挨拶が良くなった	76人	(歌や行事の) 団結力・協力性が高まった	102人
授業への集中が良くなった	21人	仲間との絆が強まった	19人
けじめが付くようになった	9人	掃除が良くなった	4人

このように、本能寺の誓いは生徒の心に強く残り、その後の生活に大きく影響を与えていることが上の結果より分析できる。特に、団結や協力性が高まり学級の歌や応援などみんなで活動することが向上したと感じている生徒が40%、挨拶が向上していると感じた生徒が30%にのぼっている。

これは先に述べた研究仮説「日本文化を学ぶこと(修学旅行)を通して、仲間との信頼関係を築くことができる」と「修学旅行での誓いを通して、集団に対する帰属意識が高まり、挨拶や校歌に対してより一層頑張るようになる」が表れたと判断できる。

また、仲間関係に置いては、

部活復帰できた

と書いてきた生徒がいた点に注目したい。この生徒は2年生の後半から、仲間関係をきっかけに部活動への不応が表れ不登校気味だったが、修学旅行への取り組みから徐々に回復し、夏の総体では部活動に戻ることができた。当初、5ヶ月間全く部活動に来なかったのに急に来ようになり理由が分からなかったが、この一文を観て、納得でき、改めて誓いの重さを感じさせられた。

今回、先に述べたように、練習から生徒が主体的に行ってきたことが成功の要因としてあげられるが、この他に次のことも成功の背景にあったと考えられる。

本校の修学旅行での誓いは伝統的に行われてきたものである。

今の3年が1年の時に、当時の3年から誓いを通して学年全員が一つの気持ちになれるという話を聞いており、自分たちも3年になったら同じ体験ができるのだという期待と目指す姿があったことから、気持ちが作りやすかった。

林間の誓いで良かったこと、悪かったこと、そして林間の誓いがその後に活かされてきたかを経験してきて、誓いという行為に対して気持ちが込めることができた。特に、林間で自分達の誓いをうまく表現できなかった学級が、うまく誓いを表現でき、その後の生活に活かしていた学級を観て、自分達も次はより良いものを作ろうとする気持ちになっていた。

このように考えると、本校の「誓い」という活動は決して特殊なものではなく、どの学校でも行える活動なのではないかと考える。特に、林間で誓いを行ったがうまくいかなかった学年では、なぜうまくいかなかったか、どうすれば良いのかということを生徒に考えさせ、再挑戦の機会を与えることになり、リーダーの成長にも繋がるのではないかと思う。しかし、誓いを行う際に、その基となる学校生活への安心や信頼感、下級生が手本となる上級生の活動があってこそ成功するものであると今回の活動を通して強く感じた。

< 今後の課題 >

今後の課題として、日本文化に対する生徒の意識を過去の遺物ではなく現在の自分達につなげていくものともっと強く捉えさせることである。本校では読経体験という手段を用いて取り組んでいるが、他のアプローチの方法もまだまだ考えていく必要がある。また、鎌倉の日本文化探究でこの点について更に取り組んでいく必要があると感じている。

最後に、修学旅行の活動そしてこの本能寺の誓いを行った後、強く感じたことは、教師自身が生徒に何を3年間訴えてきたのか、この3年間で何を創り上げてきたかを改めて振りかえさせられたことである。そして、この活動が我々にとって、その後の指導の指針に繋がるものになったということ、現在も続けていることを付け加えて終わりとしたい。